



Title	日韓問題と共存する女性たちのアイデンティティ : 韓国での不買運動に関する語りの分析を通して
Author(s)	竹村, 博恵
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85096
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日韓問題と共存する女性たちのアイデンティティ —韓国での不買運動に関する語りの分析を通して—

竹村 博恵

1. はじめに

現在韓国には、居住ビザ・永住ビザ・結婚移民ビザ¹を使用して滞在している結婚移民といわれる女性たちが 214,658 名存在している。そのうちの 13,080 名が日本人女性であり、中国人、ベトナム人について 3 番目に滞在人数が多い結婚移民女性集団となっている（韓国法務部 2020a, b）。韓国人男性と日本人女性の国際結婚の動機には大きく分けて、内鮮結婚型²、宗教結婚型³、恋愛結婚型の 3 種類が存在するが（Kim, Seog-Ran 2007⁴）、日韓両国で行われている彼女たちに関する先行研究の大半は内鮮結婚型と宗教結婚型の日本人女性を対象としたものであり、近年増加傾向にある恋愛結婚型の日本人女性に関する研究の必要性が指摘されている（Park, Esther 2017）。そこで本稿では、韓国人男性と恋愛結婚し韓国に移住して日韓にルーツを持つ子供を育てている日本人女性を「在韓日本人女性」として位置付け、既存の在韓日本人女性に関する研究ではあまり注目されてこなかった彼女たちを研究対象として取り上げる。

恋愛結婚をした在韓日本人女性に関する先行研究のほとんどは韓国で実施されたものであり、彼女たちの韓国社会への適応や文化受容態度（Yim, Young-Eon et al. 2013, Kubo 2015）、養育上の葛藤（Park, Esther 2017）、アイデンティティ構築に関するもの（Ishii et al. 2015）などが見受けられる。それらの先行研究では、日常生活に介入してくる日韓問題の影響⁵が、個人的な対処が難しい在韓の日本人女性独特の問題として指摘されているものの、度重なる母国への批判にさらされる彼女たちに対する憂慮やそれに関する間接的な言及にとどまっている。その為、日韓国際結婚家族の構成員であり日韓ダブルの子を持つ母親でもある彼女たちが、日々の生活の中で日韓問題に起因する出来事をどのように認識し、どのようにそれらと関わり合っているのか、またその中でどのような課題を抱えているのかに関する詳細な調査が不足している現状にある。

そのような状況に鑑み、本稿では在韓日本人女性へのインタビュー調査の中に現れた日本製品不買運動⁶に関する語りを分析対象として定め、1)彼女たちが、その当時自分を取りまく社会的世界をどのように認識していたのか、その中でどのように自らを位置付け、目の前の状況と交渉

¹ 韓国では、2010 年以降、在留外国人の中で居住ビザ（F-2-1）、永住ビザ（F-5-2）、結婚移民ビザ（F-6-1, 2, 3）を所持している者を結婚移民として承認している（韓国法務部 2020b）。

² 韓国併合以降、第二次世界大戦後に朝鮮が独立するまでの 35 年間に日本人と朝鮮人との間で結びばれた結婚を「内鮮結婚」あるいは「内鮮通婚」と呼んでいた（竹下 2000:54）。本稿では竹下の用語を引用し、この型に分類されるものを内鮮結婚型とした。

³ 韓国社会では、統一教会を介した宗教結婚によって日本人女性が韓国に嫁いでいることはよく知られている。近年、恋愛結婚で韓国人男性と結婚する日本人女性の数も増加傾向にあるが、少し前までは日韓の国際結婚といえば宗教結婚という認識が一般的であった（中西 2014:68）。

⁴ 本稿で引用した韓国語の文献は、題目の理解や検索のしやすさを考慮し論文内に記載されていた英語の著者名と英語題目を使用して表記した。参考文献への記載には、英語文献と区別するために末尾に韓国語文献である旨を提示している。

⁵ 筆者が 2019 年 8 月・9 月に韓国で実施したインタビュー調査（14 組：計 28 名）の中でも、竹島はどちらの国のものだと思うか質問される、子供が保育園に入園するとはじまる歴史教育・領土教育への憂慮、母親が日本人だということできじめにあった、日本語を話すなど怒られたなど、様々な日韓問題に起因する出来事との遭遇が話されていた。

⁶ 2019 年夏に日本政府が発表した韓国への一部半導体関連製品の輸出管理強化措置を受け韓国で始まったものを指す。過去に起こったものとは異なり、今回の不買運動は韓国社会全体に普及し、学校や公共交通機関、スーパーなどでも不買運動を促す垂れ幕やポスターなどを目にするような状況になった。

していたのか、2)不買運動を媒介とした他者（性）⁷との関わり合いの中で実践される彼女たちのアイデンティティとはどのようなものか、という2つのリサーチ・クエスチョンを設定する。そして、それらを検証することを通して、揺れ動く日韓関係の狭間で日韓問題の影響と共存せざるをえないという状況下で生活している彼女たちの実態を明らかにすることを目的とする。また、その結果をもとに、日韓問題や日韓関係の悪化が不定期に勃発する中で危うい立場に晒されやすい彼女たちが、自力での改善やコントロールが困難な問題に振り回されることなく少しでもよりよく生きていくことができるような社会的・心理的支援の開発への示唆の発見を目指す。

2. 理論的枠組み

本稿においては、「アイデンティティ」・「インタビューのなかで行われる自分自身に関する語り」・「枠組み」に関し、バトラーの思想を理論的枠組みとして概念化を行った。また、インタビューの中に現れる語りとそれを取り巻く相互行為を分析する際の理論的枠組みとしては、スモール・ストーリー、ポジショニング分析を採用した。以下でそれぞれについて簡略に述べる。

2.1 J. バトラーの思想（「アイデンティティ」・「自分自身に関する語り」・「枠組み」）

バトラーは、アイデンティティを、その中に自己を見出すための前提とされるカテゴリーではなく、現在進行中の言説実践として介入や意味づけ直しに向かって開かれている「意味づけの実践」として定義する（バトラー 1999:73, 254）。また、そのような実践は「身体（常に他者にさらされている存在であり、わたしたちがさまざまな観点に出会う場）」（バトラー 2012:72）を介して生じる他者（性）との関わり合いの中で行われるとする。そして、そのような実践が行われるプロセスは、「私（アイデンティティの実践を担う身体）」が、他者からの呼びかけ⁸に回答して行う語り（自分自身についての説明）と、それを取り巻く相互行為の中において観察されうると述べている（バトラー 2008:23-24, 35-37, 207-209）。なぜならそこには、呼びかけに応じた語り手が一旦自分の立ち位置を引き受けたのち、自分を取り巻く他者（性）との関わり合いの中で自身の立ち位置を再調整し、その新たな位置を足がかりにして他者（性）との関係性を再構築していく過程、つまり「私」が他者との関わり合いの中で行うアイデンティティの実践が現れているからである。また、バトラーは『戦争の枠組み』の中で、人は他者や自分ではコントロールできない状況に直面すると身体の応答性⁹が活性化され暗黙のうちに特定の解釈行為を確立してしまうと述べ、その解釈の中には自身を侵害し影響を与える他者（性）を身体がどのように認識し、それらに対しどのようにネゴシエイトしていくかを決定する枠組みが現れると指摘している（2012:48-49）。本稿ではこれらのバトラーの思想を理論的枠組みとし、アイデンティティを「関わり合いの中で行われる意味づけの実践」、インタビューの中に現れる彼女たちの語りを「呼びかけに応じて開始される自分自身の説明」として定義する。また、不買運動に関連した語りや、相互行為の場においてなされる彼女たちの発言を分析する際には、バトラーの「枠組み」の概念を使用し、彼女たちが出来事との遭遇を通じてどのような情動を抱き、そこからどのような解釈の

⁷ バトラーのいう他者性とは、物理的な人間という存在としての他者だけでなく、個人が身を置く生活環境、そのなかに存在する社会的規範、認識の枠組みなどを包括した社会的世界をも含んだ概念である（バトラー2012:48-49、藤高 2020:7-8）。

⁸ バトラーは、人は「呼びかけ」に対し必ず回答するのではなく、それに回答するかしないかを自分で選択し、時には「呼びかけ」られていなくても振り向いてしまうことがあると述べ、このような「呼びかけ」という言語行為の失敗の中に人の行為体（agency）としての可能性が認められるとしている（大貫 2007）。

⁹ バトラーのいう「応答性」とは、直面している状況に対する反応であり、そこには喜び、憤怒、くるしみ、希望などの幅広い情動が含まれる。また、それらは観念作用や批評の基礎であり要素でもある（バトラー 2012）。

枠組みが確立され、どのように状況を認識し交渉していくのかについても考察を行う。

2.2 スモール・ストーリー

スモール・ストーリー・リサーチでは、語り手は「自己を行う」(イェルガコポロ 2013:26) ためだけにストーリーを語るのではなく、それが披露された相互行為の場において何かを成そうとする談話上の関与をも同時に行っているという観点に立つ。そして、ストーリーの内容とそれを取り巻く相互行為の両方を等しく分析対象とする。さらに、それら 2 項目への分析を通して、語り手が相互行為の場においてストーリーを語る中で実践しているアイデンティティを明らかにすることを目指す(イェルガコポロ 2013)。また、ストーリーの中に提示される局所的なアイデンティティへの習慣的な関与は、私たちが何者であるかという連続する意識の基盤を構築することへと繋がっていくと考える(Bamberg & Georgakopoulou 2008, イェルガコポロ 2013)。スモール・ストーリーの具体的な例としては、インタビューの中に現れる現在進行中の出来事や、未来や仮定の出来事に関する語り、ほのめかし、語りを据え置くこと、語ることを拒否することなど、短い内容のものが挙げられる(秦 2013)。

2.3 ポジショニング分析

Bamberg (1997, 2004) が提唱したポジショニング分析は、会話という相互行為の中に現れるナラティブの中で、語り手が「自己を“行う (do)” 方法」(イェルガコポロ 2013:19) を発見するための手法として多くの研究者に採用されてきた。ポジションとは、前提とされるものとして語り手が所有しているものではなく、ナラティブが相互行為の場において伝達される過程のなかで出現するものである(1997:333)。Bamberg は分析のための 3 つレベルを提示しており、一つ目は、語られる世界に描かれる他の登場人物との関わり合いの中で示される自己(レベル 1)、二つ目は、語りの世界において他の参与者との関わり合いの中で示される自己(レベル 2)、三つ目は、レベル 1・2 の自己の提示を通して創造される包括的な社会文化的自己(レベル 3)である。本稿では、インタビューの中に現れる語りとそれを取り巻く相互行為の場の両方を分析対象とし、語られる世界・語りの世界において語り手が他者との関わり合いの中でどのように自らを位置付けるのかを明らかにする。そして、それを通じて、二つの世界において立ち現れるポジションのもとで、語り手が実践するより包括的な社会文化的自己(アイデンティティ)がどのようなものかを捉える。

3. データ

本稿で使用するデータは、2019 年 8・9 月に韓国で実施したインタビュー調査の一部である。インタビュー参与者 3 名(インタビューー 2 名、インタビュアー 1 名)は全員が在韓日本人女性であり、日韓にルーツを持つ子供を韓国で育てる母親でもある。インタビューーであるユキ(仮名)とナオ(仮名)は在韓日本人の母親で構成された集まりで知り合った友人同士であり、年齢はともに 30 代前半、インタビュー実施時の在韓歴はユキが 8 年、ナオが 2 年であった。ユキの職業は日本語講師であり、ナオは専業主婦である。インタビュアーである調査者は 30 代後半であり、インタビュー実施時の在韓歴は 7 年、日本の大学院に在籍する学生であった。インタビュー実施時、韓国での永住権を取得している者はいなかった。3 人は調査者の友人を介して知り合い、インタビュー実施時は初対面であった。インタビューはユキとナオの共通の友人宅で実施され、ボイスレコーダーによる録音と 2 台のビデオカメラによる録画を同時に行った。

4. 分析

本稿では、データ 1 に現れたユキとナオのスモール・ストーリー、データ 2 に現れたユキのスモール・ストーリー、そしてそれらを取り巻く他の参加者の会話を中心に分析を行っていく。

4.1 データ 1: 「日本人であることを出せない」

- | | |
|--|--|
| 1. ユキ : (2) <u>日本人</u> 入っていうのを前にあんまり出せない | 25. ユキ : うん |
| 2. : (...) 状況って言うんですか | 26. ナオ : そうするとちょっと (ユキを見て) ねえ? |
| 3. ナオ : うんうんうん | 27. ユキ : うん |
| 4. 調査者: ああ↑:: | 28. ナオ : いっぱいづらいです |
| 5. ユキ : 例えば子供と喋っ() 今は「子供いますけど(ナオを見る)」 | 29. ユキ : <u>日本語</u> って思ってるのか <u>外国語</u> って思ってるのか |
| 6. ナオ : ああわかりますそれ(ユキを見る) | 30. : わかんないけれど↑も |
| 7. ユキ : 電車乗ってて :: こんなんしたらあかんよとか | 31. 調査者: うんうん |
| 8. ナオ : ↑ わかりますそれ-↑ | 32. ナオ : うん |
| 9. : うん うん | 33. ユキ : (...) 受ける側としたらそういう印象 |
| 10. ユキ : ねっ() 喋る() かける言葉が↑:: ああ日本語? | 34. 調査者: うん↑:: |
| 11. : (...) っていう | 35. ナオ : うんうん |
| 12. ナオ : うんうん(ユキを見る) | 36. ユキ : 今↑は: (2) それかこう() ちょっと |
| 13. ユキ : っていうその周りの視線 | 37. : 1 何年か前とかって比べると |
| 14. ナオ : 思います | 38. 調査者: 1 なるほど |
| 15. 調査者: ふ::ん | 39. ナオ : 2 うん:: |
| 16. ナオ : 電車とか() たっ() バスとか乗ってて↑: | 40. ユキ : 2 あっ日本人っていう感じじゃない <u>感じじゃないかなって</u> |
| 17. ユキ : うん | 41. : > 被害妄想かもしれないけど<(1) 思っちゃう |
| 18. ナオ : やっぱ <u>自分</u> は日本語で話したいので:: | 42. 調査者: う::ん |
| 19. ユキ : うん | 43. ユキ : うん() ていう面は住みにくい() ねえ? |
| 20. 調査者: うんうん↑:: | 44. : (ナオの方を見てうなづく) |
| 21. ナオ : 話すとやっぱり() <u>向く人</u> は向きますよね | 45. ナオ : うん(ユキに見られてうなづく) |
| 22. ユキ : うん | 46. ユキ : うん |
| 23. : うん | 47. 調査者: ああなるほど |
| 24. ナオ : 日本語で話してる | 48. ユキ : う::ん |



図 1. ステッカーの例

データ 1 の開始前、ユキは電車の車内に貼られている日本の国旗を模して作成された不買運動を促すステッカー (図 1¹⁰) に関する語りを披露した。ユキは車内でステッカーを目にすると視覚としての怖さを感じると話し、ナオもそれに同意を示した。さらにユキは、不買運動自体は勝手にしてくれれば良いと思うと発言した上で、ステッカーに関しては自分の国の国旗がそのような形で貼られ、そこに書か

れている韓国語も理解することができ、それを目にした時の気持ちは嫌という表現では言い表せない、上手く説明できる言葉が見つからないものだと述べていた。またユキは、今は韓国で嫁として住みにくいと言い、それを聞いた調査者が具体的にどういった住みにくさがあるのかと質問した。上に示したデータ 1 は、質問に対するユキの回答から始まっている。

調査者の質問に対しユキは、住みにくさを感じる要因として「日本人っていうのを前にあんまり出せない状況」(1, 2) をあげる。そして、続く 5 行目からは具体的な例をスモール・ストーリーの形で挿入し、より詳細に説明する。スモール・ストーリー (5-13) の中でユキは、電車に乗っ

¹⁰ 韓国の検索サイト Naver (<https://www.naver.com>) で「No japan」で検索後、イメージのページに表示される画像例 (アクセス日 2021/3/1)。ポイコットジャパンの下には、韓国語で「行きません」「買いません」という内容の文章が記載されている。

ている際に子供に日本語で話しかけた時の状況を描き出し、それに気づいた他の乗客から向けられる「ああ日本語?」(10)という視線を気にする自身の姿を提示する(電車の中で日本語を話した際に周囲の視線が気になる私：レベル1)。ユキの語りを聞いていたナオは、ユキが話の核心に触れる前から何度も「わかります」(6, 8)と同意を示しており、5行目の時点で既にユキが今から語ろうとしている状況と相似したものがナオの頭の中にも浮かんでいることがわかる。そして、ユキの語りを受けて披露されたナオのスモール・ストーリー(16-28)では、ナオ自身が28行目でそのような視線を受けて居づらいという感情を明示している(電車・バスの中で日本語を話した時に周りの視線が気になり居づらい私：レベル1)。それを受けユキは、今度は相互行為の場において、自分たちに視線を向ける韓国の人たちが「日本語って思ってるのか外国語って思ってるのかわかんない」(29, 30)と前置きした上で、自分たち(ユキ・ナオ)を「(韓国の人々からの視線を)受ける側」(33)として位置付ける。そして、「今はそれがこうちょっと、何年か前と違って比べると」(36, 37)と述べ、日本語を話すことで視線を向けられるという状況は昔から存在したこと、しかし現在の状況と比較すると何らかの違いがあるように思えることを間接的に指摘する。その後40行目で、現状況下で視線が気になったり居づらさを感じたりする要因について、不買運動が起こる前と比較すると単に日本人がいるという感じではない意味合いがその視線に含まれているからではないかと感じてしまう為だと説明する。しかしながらユキはその直後に、そのような自身の印象について「被害妄想かもしれない」(41)と述べ、あくまでもそれは自分が一方的に抱いているイメージかもしれないことを明示している。つまり、ここでユキが調査者に対して示したい「住みづらさ」とは、日本語を話すことで視線を向けられるという以前から存在した事態よりも、視線の真意がわからないが故に日本人であることを前に出すのを躊躇しながら暮らさねばならないという現在の状況であることが理解できる。このように、相互行為の場においては、ユキとナオがそれぞれ自身の経験をスモール・ストーリーで提示しながら、調査者に「住みづらさ」を理解してもらおうと協力し合う様子が観察され、そのようなやりとりの中で「日本人であることを前面に出せない私たち(レベル2)」、「日本人であることで悪印象を持たれているのではと不安になる私たち(レベル2)」という彼女たちの立ち位置が協働構築されていた。

以上のように、データ1では語られる世界と相互行為の場の両方において、不買運動の最中に韓国で暮らす彼女たちが日本語を話すという状況、つまり自分が日本人であるという事実を韓国社会の中で表明することに対し不安感を感じていることが明示された。そして、その結果、日本に対する批判が強まる韓国社会の中で「ありのまま暮らせないマイノリティとしての私たち(レベル3)」という彼女たちの包括的な社会文化的自己の実践が明らかになった。

4.2 データ1：バトラーの「枠組み」と状況への交渉

次に、不買運動のさなかに韓国で公共交通機関を利用した彼女たちが、そこで遭遇した状況や他者に対しどのような情動を抱き(情動の提示)、どのような解釈の枠組みを構築し(解釈の枠組みの提示)、どのように状況と交渉していたのか(交渉姿勢の提示)について、データ1に現れた語りと相互行為を対象にして分析・考察する。

データ1の開始前、ユキは、不買運動は勝手に行えばいいと思うが、車内で目にする不買運動を促すステッカーには視覚的な怖さを感じるという語りを行う。そして、ナオもその発言に対し同意を示していた。これらのやりとりから、不買運動に対してではなく、普段利用する電車の中に貼られているステッカー(図1参照)を目にした際に、彼女たちが「怖さ」を感じているということがわかる(情動の提示)。この時点で、ユキは「日本人としてステッカーに怖さを感じる私」

4.3 データ 2: 「誤解を解きたい」

- データ 2 の開始前、ユキはインタビューの少し前に日本に帰国していた時の語りを披露した。そこでユキは、自分の幼馴染の母親から聞いてはいけないことかもしれないが質問しても良いかと言われ、現在の韓国の状況に関しての質問を受けたと話した。ユキは、自分たちの母親世代は

日本のニュースで報道される韓国の様子などから情報を得ているため、そのような状況の中でユキが傷ついていたらどうしようと不安に思い、なかなか自分に韓国のことについて質問できないようだと言った。またその体験を通して、近い人が現在の韓国をどのように認識しているのかを知ることになったと言い、その知人に対し実際の韓国の状況は不買運動が起こる前と変わらないこと、その影響で航空券が安くなるので助かったと感じていることを伝えたと言った。それを聞き調査者は、知り合いに韓国の現状を説明した際にユキの中にどのような感情が湧いてきたのかと尋ねた。データ2は、その質問に対するユキの回答から始まっている。

調査者の質問に対し、ユキは「韓国の家族」(56)を持つ者として自らを位置付けたのち、「悪く言われた時は言い返す」(58)と発言する。それに対し調査者は、「どんなふうに悪く?言われたことがあります?」(61,62)と問いかけ、それに対しユキは「ちゃんと説明しとかなあかんと思ったことがある」(64)と述べ、韓国人の家族を持つ者として韓国が悪く言われた時はちゃんと説明しなくてはいけないという意志を自らが持っていることを示す。そして、68行目からは、調査者に対しよりわかりやすく自身が思い描く事態を伝えるためにスモール・ストーリーを語り、具体的にそれがどのような状況なのかということ为例示する。スモール・ストーリーの中で、ユキは今回の不買運動の状況を例に挙げ、日本のニュースだけを見て韓国は今大変なことになっていると認識している日本本土で暮らす日本人に対し、「私が住んでるところにデモしてる人まずいいひん」(71)、「みんな優しくしてくれる」(74)、「私とかその子供がなんか日本人やろお前みたいなことを絶対言われることはない」(75-77)と、実際に韓国で暮らす自分が知り得る様々な事実を列挙しながら説明する(韓国に暮らす者として韓国の現状を説明する私:レベル1)。そして、そのような説明を「言います絶対に」(78)と強調し、説明しなければいけないという強い意志が自身の中にあることを改めて調査者に対し提示している。ユキの発言を受け調査者が、それは質問してきた相手に安心して欲しいからか(81,82)と問いかけると、ユキは83行目で安心して欲しいという気持ちもあるが「ちゃんとそこわかって」(84)という「わかって欲しい気持ち」(86)、「誤解を解きたい」(88)気持ちからの行動なのだと述べる。また、それは「自分と自分の家族」(94)のために生じる思いであり行動なのだと発言する。84行目のユキがわかって欲しいと思っている「そこ」(84)とは、その後にユキが「誤解を解きたい」(88)と発言している点から、日本で報道されている韓国の情報と実際の韓国の現状は異なっていること、であることがわかる。つまり、データ2において、冒頭で韓国人の家族を持つ者という自身の立ち位置を引き受けたユキは、スモール・ストーリーの中では日本社会に普及する韓国イメージと自身が知る韓国の状況にどのような乖離があるかを具体的に示し、相互行為の場では日本社会にはニュースからの影響で生じている韓国に対する誤解が存在していること、それに対し自分自身と自身の家族のために自らが知っている事実を説明することで対抗したいという強い意志を自分が持っていること(偏った情報だけで韓国を悪くいう人の誤解を解きたい私:レベル2)を示しているのである。このようなユキの姿勢に対し、ナオと調査者も「うん」と相槌を返しつつ耳を傾けており、同じ境遇にいる在韓日本人女性として彼女の意志に対する理解を表明している。

以上のように、データ2では語られる世界と相互行為の場の両方において、不買運動の最中に日本に帰国したユキが、韓国に対する誤った認識に遭遇した際に自身と自分の家族のためにその誤解を解きたいという強い意志を持って行動している様子が明示された。そして、その結果、韓国に対する偏った印象が構築されている日本社会の中で「日本社会の風潮に対抗するマイノリティとしての私(レベル3)」というユキの包括的な社会文化的自己の実践が明らかになった。

4.4 データ2：バトラーの「枠組み」と状況への交渉

次に、不買運動の最中に日本に帰国したユキが、韓国の状況を誤解している知人と会話をした際に、そこで遭遇した状況や他者に対しどのような情動を抱き（情動の提示）、どのような解釈の枠組みを構築し（解釈の枠組みの提示）、どのように状況と交渉していたのか（交渉姿勢の提示）について、データ2に現れた語りと相互行為を対象にして分析・考察する。

データ2の開始前、ユキは近しい人から韓国の状況を心配された語りを披露した。そこでユキは、自分たちの母親世代の人は日本のニュースが報道する内容を韓国の現在の状況だと信じているため、実際に韓国に住んでいる自分とは韓国に対する見方が異なっていると述べた。そして、その異なりに対してそうではないということを説明したと話した。調査者がその際にどのような気持ちになったのかを質問すると、ユキはデータ2の冒頭で「韓国人の家族を持つ私」という立ち位置を引き受け、悪く言われたら言い返す(58)と発言した。しかしその後ユキは、言い返すという行為についてちゃんと説明する(64)というように言い直し、喧嘩のような状態ではないということを明示した上で、具体的な状況例についてスモール・ストーリーを使用して調査者とナオに対し提示する。語りの中では韓国人の家族をもち実際に韓国に住んでいるユキが、日本本土で日本のニュースから情報を得ている人に「大変なんやろ?」(68)と心配されるという場面が描かれる。ユキはその発言に対し「えっちょっとまって」(69)とそれを制止させ、続いて自分が実際に目で見た韓国の状況を挙げながら、相手の持っている情報と現実が異なっていることを説明しようと試みる（交渉姿勢の提示）。また、その後の相互行為の場において、そのような行動は自分と自分の家族のために韓国を誤解している相手にちゃんと現状をわかって欲しい、誤解を解きたいという気持ちが要因となって生じていることが明らかにされる（情動の提示）。これらのユキの発言からは、実際に韓国に住み現状をその目で見ている者から見れば日本国内で行われている韓国に関する報道には偏りが存在している、そしてそこからしか情報を得ることのできない本土の日本人は韓国の現状を誤解している、とユキが認識していることがわかる（解釈の枠組みの提示）。またデータ2の中では、日本の韓国に対する報道スタイルの特徴という国家的なレベルの志向性に対し、個人的な対抗であったとしてもその偏りを指摘し、なんとか韓国の実際の姿をわかってもらいたい・誤解を解きたいと行動するユキの心情や姿勢も観察することができた（情動の提示・交渉姿勢の提示）。しかしながらその一方で、「韓国人の家族を持つ者」という立場を引き受け、日本に住む人々が持つ韓国に対する誤解を解きたい・自分が見ている韓国の姿を相手にも知って欲しいという意志が前景化することにより、データ1の中で示された自らが感じている恐怖心は後景化し、近しい人の前であってもそれに対する言及ができていない状況も見受けられた。

5. まとめ

先述した在韓日本人女性に関する先行研究では、彼女たちの背後に「日本人」や「韓国に住む日本人」など既に作られたコミュニティや主体が存在するという前提のもとで語りの内容のみが文脈から切り離されて分析され、彼女たちの発言からその背後にある日本人コミュニティや日本人の特徴を把握しようとするものが大半であった。それゆえに、在韓日本人女性は、韓国で長年暮らしていても日本名を改名しない・日本国籍を維持している・日本文化を維持したまま生活する、などの特徴を持った集団として位置付けられ、それが彼女たちのイメージを構築している傾向が見られた。そこで、本稿ではアイデンティティーを「他者との関わりの中で実践されるもの（＝意味づけの実践）」と定義し、インタビューの中に現れた在韓日本人女性の不買運動に関する

語りだけでなく、それを取り巻く相互行為にも焦点を当て分析・考察を行った。そして、彼女たちがなぜそのような発言をするに至ったのか、どのような関わり合いの中でアイデンティティが実践されているのかという、彼女たちが身を置く社会的な環境や関係性との関わりも同時に検証した。その結果、韓国社会においては「ありのまま暮らせない私（たち）＝日本人という自分の一部を躊躇なく表出できない私（たち）」、日本社会においては「主流社会の風潮に対抗する私」というマイノリティとしての立ち位置に彼女たちが立たされていることが明らかになった。同時に、韓国社会においては、自分が身をおく状況（韓国社会や韓国人）に対して具体的な行動を起こし対抗することはできない様子、しかしその一方で自分の心の中に反射的に湧き上がる恐怖やそれに即して構築される韓国（人）に対する解釈の枠組みに対してはそれを頭から受け入れず対抗する様子が観察された。これは、韓国で実際に生活してきた歴史や経験が瞬間的に生じる恐怖に呑み込まれるのを押しとどめている反面、そのような経験があってもなお日本に対する否定的なメッセージを目にすると反射的に恐怖を感じてしまうという不安定な状況のもとで、彼女たちの精神が揺れ動いていることの現れのように見受けられる。そしてまた、日本社会においては、自分が身を置く状況（日本社会や日本人）に対して、韓国を知る者として誤解を解こうと具体的な行動を起こし対抗している姿が見られたものの、それと同時に韓国を知る者として誤解を解くという役割を担っているがゆえに実際に自分が感じている恐怖を近い日本の知り合いにも打ち明けることができないという彼女たちの複雑な立ち位置が観察された。

本稿の結果は、日常生活の中に自分の力ではどうしてもできない国際問題に起因する影響が介入してくるといふ彼女たちの現状を、直接的に変化させるための助けにはならないかもしれない。しかしながら、本稿の結果が、危機的な状況と向き合う中で構築される彼女たちの危うい立ち位置を日韓両国の人々に理解してもらう一助となれば、周囲の彼女たちに対する認識に変化が生じ、それが結果的に彼女たちの置かれた状況を少しでも変化させる契機になるのではないかと考える。今後は、不買運動に関する語りだけでなく、竹島問題、夫婦間での日韓問題への関わり方、子供との歴史問題や政治問題に関するやりとりに関するものなど、インタビューの中に現れた日韓問題と関連のある多様な語りを分析しながら、日韓問題と共存する彼女たちの実態をさらに明らかにしていきたい。そして彼女たちの実態を明示することを通して、移民の人々が周囲の人々から本質主義的な民族性やアイデンティティに関する支配的言説を投影された際にどのような多文化的実践を行いつつそれらと交渉しているのかを提示し、彼・彼女たちの混淆性について受け入れる側の理解を促すとともに、彼・彼女たちの向き合う課題は自分たちとの関係性の中で生じているものであるということを再認識するための示唆の発見を目指したい。

参考文献

- Bamberg, Michael (1997). Positioning Between Structure and Performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1/4), 335-342.
- Bamberg, Michael (2004). Form and Functions of 'Slut Bashing' in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds. *Human Development*, 47(6), 331-353.
- Bamberg, Michael, & Georgakopoulou, Alexandra (2008). Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis. *Text & Talk*, 28(3), 377-396.
- バトラー・ジュディス (1999). ジェンダー・トラブル -フェミニズムとアイデンティティの攪乱- 竹村和子 (訳) 青土社.
- バトラー・ジュディス (2008). 自分自身を説明すること -倫理的暴力の批判- 佐藤嘉幸・清水知子

- (訳) 月曜社
- バトラー・ジュディス (2012). 戦争の枠組み -生はいつ嘆きうるものであるのか- 清水晶子(訳) 筑摩書房
- イェルガゴポロ・アレクサンドラ (2013). ナラティブ分析 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線 -人は語ることで何をなすのか- pp.1-42 ひつじ書房
- 藤高和輝 (2020). 他者とともにあるために：ジュディス・バトラーの責任論 (特集 責任という旅路)と世界 福音と世界, 75(9), 6-11.
- 秦かおり (2013). 「なんとなく合意」の舞台裏 在英日本人女性のインタビュー・ナラティブに見る規範意識の表出と交渉のストラテジー 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線 -人は語ることで何をなすのか- pp.247-271 ひつじ書房
- Ishii, Hiroko, Min, Kiyeon, Seongok, Yuhua, & Lee, Yongsun (2015). Investigating the Cultural Identity of the Japanese Marriage Immigrant Women in Korea. *The Journal of Multicultural Society*, 8(2), 107-144. (韓国語文献)
- Kim, Seog-Ran (2007). A study on marriage motivation of Japanese-wives living in Korea. *Journal of Japanese Language Education Association*, 42, 241-258. (韓国語文献)
- 韓国法務部 (2020a). 国籍(地域)別在留外国人現況 <https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01&outLink=Y&parentId=A.1;A_9.2;#content-group> (2021年3月20日)
- 韓国法務部 (2020b). 結婚移民現況 e-国指標 結婚移民現況 <http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx_cd=2819> (2021年3月20日)
- Kubo, Miho (2015). *Cultural adaptation and mental health of Japanese immigrant women married Korean*. Master's thesis, Sangmyung University, Seoul, Korea. (韓国語文献)
- 中西尋子 (2014). 在韓の統一教会元信者の日本人女性と韓国キリスト教会 宗教問題, 8, 62-71.
- 大貫挙学 (2007). 主体と社会のパフォーマティヴィティ: J. バトラーにおけるふたつの他者性めぐって 年報社会学論集, 20, 61-71.
- Park, Esther (2017). Qualitative Research on Conflicts in Child-Rearing and Coping Strategy among Japanese Wives in Marriage Based on Love. *Journal of Japanese Language and Culture*, 38, 281-302. (韓国語文献)
- 竹下修子 (2000). 国際結婚の社会学 学文社
- Yim, Young-Eon & Lee, Hwa-Jung (2013). A Study on the Model of Acculturation and Multicultural Acceptance Attitude of Japanese Residents in Korea PDF icon. *The Journal of Peace Studies*, 14(4), 187-205. (韓国語文献)

トランスクリプト記号

(.)/(..)	0.2 / 0.5 秒以下の短いポーズ	@	笑い(個数は長さ)
↑↓	イントネーションの上昇と下降	ああ	声が前後に比べて大きい箇所
(数字)	(数字)秒の短いポーズ	[	発話の重複の開始箇所
_____	強調的に発音される箇所	°ああ°	声が前後に比べて小さい箇所
?	疑問形の上昇イントネーション	¥-¥	笑いながらの発話(¥ ¥の間)
:	音の引き伸ばし	()	状況説明
(:の数	が長さを表す)	><	前後に比べ発話速度が早い
=	続いて聞こえるように発話された箇所		